

## 建築と融合した街の賑わい ～シンガポールのビジネス街における緑化と人の賑わい～

### はじめに

シンガポールはなんといっても、「豊かな緑に包まれた美しい島国」ではないでしょうか。

そんな島国に、2019年6月27日から30日の4日間、視察を行った。今回で2回目の視察となる。1回目の視察では、シンガポール植物園、GardensbytheBay(ガーデン・バイ・ザ・ベイ)やMountFaber Park(マウントフェーバー公園)などシンガポールを代表する公園や植物園等の自然を満喫したが、今回は「建築と融合した緑化と街の賑わい」をテーマに、セントラル・ビジネス・ディストリクス(ビジネス街)やオーチャード・ロード(ショッピングモール)、リトルチャイナ等の様々な用途の緑化デザインや人の賑わいの視察を行った。

### シンガポールの概要

国土面積は、約720.0km<sup>2</sup>。日本の東京23区よりも少し大きい面積である。人口は、約561万人(2017年時点)<sup>1)</sup>。因みに東京23区の人口は約950万人となっている(2017年時点)<sup>2)</sup>。気候は、年間を通して高温多湿気候で年間降雨量は、2,345mm、東京は1,467mmで、シンガポールの方がかなり多い<sup>3)</sup>。ただ、今回の視察では天候に恵まれた日程となった。

歴史は浅く、1965年マレーシアから分離・独立を果たしたが、資源が少なく、国土の狭い国家にとって、世界へアピールしていくために、初代の首相リー・クアンユー氏が緑化推進と快適に生活できる環境づくりとして「ガーデン・シティ(緑の都市)」を提唱し、世界におけるトップレベルの「緑の国家」を築き、諸外国からの投資や観光の誘致に注力を注ぎながら国際的な競争力を高め、世界の地位を確立してきた。その結果、全国土の緑被率が着実に拡大し、建国以降「ガーデン・シティ」として緑あふれる心地よい都市の環境が成熟され、近年からは次のステップとして、「シティ・イン・ア・ガーデン(緑に囲まれた都市)」というビジョンを掲げて、「緑の魅力を更に高め、日常生活にも統合させる」都市計画を展開しようとしている。

一方で、シティバンクや外資系金融機関などの主要な金融ビルや、民間の高級マンションが建ち並ぶ活気溢れるビジネス街は、超高層ビルが立ち並ぶ景観が構築されているが、航空規制により高さは280mまでと定められているのには驚いた。

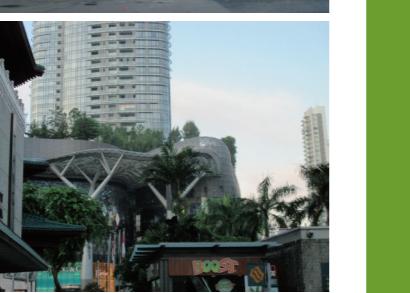
### 建築と融合する緑化技術の事例

ビジネス街を散策し、超高層のビル群が建ち並び、建築と融合した特徴ある「緑化建築」が数多くある中で、特に気になったものを3つ紹介する。もちろん都市の緑の骨格が成熟したうえで、更に建築が緑を補完し魅力を高める役割としての特徴である。「都市の緑」と「建築の緑」が融合しないながら「緑に囲まれ・潤いと賑わいのある都市」が構築されている。

#### (1) 中庭(セミパブリック)緑化

視察した建築: MARINA ONE RESIDENCES(マリーナ ワンレジデンス)

高級民間マンション。低層階は商業施設やスポーツジムになっており、中層階から高層にかけて住宅やオフィスで構成されている。建物の配置は、ロの字になっており、外からは緑の気配は感じない。エントランス部を抜けるとそこは別世界。中庭とは思えない程の緑量、緑のボリュームに圧倒され、内側から見る有機的な建築フォルムと融合した世界である。1階からだけではなく2階、3階と空中回廊から見下すことができる。そのみどりを見ながらジムで汗を流し、カフェに寛ぎ、ゆったりとした気分で住棟エントランスへ導いてくれる。街に緑を寄与しているのではなく、住む人や施設、オフィスを利用する人のための憩い空間を重視した緑の役割と言える。



#### (2) 壁面緑化

視察した建築:oasia hotel(オシア ホテル)

壁面緑化の建築は数多く存在しているが、このoasiahotelは、敷地面積に対して1110%の緑地を確保されている<sup>4)</sup>。近くから見上げても迫力はあるが、遠くから見ても周辺のガラス張り高層ビルと対照的で存在感が際立っている。建物の内部と屋上にも植栽を施すと共に、外壁の足元から建築全体をつる性の緑で覆うような骨格で構築されている。いずれも緑に覆われた究極の立体的緑化建築が実現するのが楽しみである。そのデザインや外壁フォルム、全体の色彩が斬新で非常に印象深い建築で、一度は宿泊し、内部から観賞してみたいホテルの1つである。



#### (3) 屋上緑化、空中緑化

視察した建築:PARKROYAL on pickering(パークロイヤル オン ピッカリング)

視察した街路樹だけでなく、屋上に緑を取り込むことで周囲から認されると共に、巨大建築の圧迫感や無機質な外壁素材を和やかに、街にみどりの潤いを寄与することができる。また建物のシンボル性や独創性が生まれ、街全体が緑によって賑わいが生まれる。屋上緑化は壁面緑化と同様に、近景で楽しむだけでなく、中景や遠景を意識したデザインが重要ではないでしょうか。



### 都市の魅力を演出する賑わいの街路デザイン

散策していると目につくことがある。それは、歩道の有無にかかわらず建築の規模に応じて1階のみ又は、建築全体をセットバックさせ、歩道との一体化を図った、ゆったりした歩行空間や露地のようなヒューマンスケール感の歩行空間が街全体に構築されている。歩行空間にファニチャーやアート・水景等を配置したり、高低差を利用したステップにすることで、少人数で座ったり、パフォーマンスの観客席に活用したり、様々な仕掛けで、歩いていて退屈させない工夫を感じる。それだけでなく、アイレベルの視線にも工夫を感じる。各店舗のファサードに閉塞感が無く、開放的で店舗の中が直視でき、店の賑わいが歩道に滲み出ている。セットバックすることで、店舗内のプライベート空間と屋外のパブリック空間の間の中間領域が生まれ、上手く活かした賑わいの演出が図られているのも歩行空間の魅力の1つとなっている。



セットバックすることで、屋根が連続し、降雨量が多い時期でも歩行者のネットワークが構築され、快適な歩行空間が生まれている。また、道路の横断も屋根付きの歩道橋や地下道でスマートな横断が可能となる。歩道橋にも緑を絡ませ、景観に馴染ませているのもさすが。さまざまな要素が相まって、街中の散策は非常に楽しく賑やかさが伝わってきた。

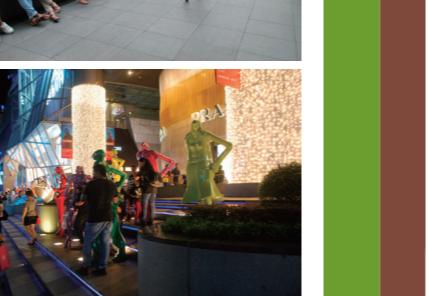


### 視察のまとめ

街の骨格としての成熟した緑と多様な緑化手法でシティ・イン・ア・ガーデン(緑に囲まれた都市)が体感できた。またそのエリアのアイデンティティを活かした人の賑わいも体感できた。

豊富な緑を持続させるには、日々の植栽をメンテナンスする行政や民間の管理体制の連携と充実、管理技術や運営の向上、植物の成長に耐える建築構造の向上、環境に耐えうる樹種の多様化などが考えられるが、それ以上に一番大事なことは、「植物に対する価値と魅力の考え方の持続と向上」ではないでしょうか。「緑」の施策で国家を繁栄させ、これからも発展し続ける「緑と賑わいあふれるシンガポール」の魅力の変化をこれからも楽しみに見守りたいと思います。

【出典】1)外務省のHP 2)東京都の人口(推計)の概要 3)シンガポールの緑化施策の概要 4)建設通信新聞【高層建築】メガシティ時代の「緑化建築」



編集・構成 荘田 隆久

## 高槻市の歴史遺産を活用し育てつづける公園づくり ～安満遺跡公園と市民活動～

### はじめに

高槻市は、大阪市と京都市とのちょうど中間に位置し、二大都市のベッドタウンとして発展している。その高槻市の中心部、阪急高槻市駅から徒歩10分の立地に、甲子園球場約5個分(21.8ha)という広大な緑空間を有する「安満遺跡公園」が、2019年3月に一次開園した。

京都大学大学院農学研究科付属農場跡地とその周辺一帯を利用して、歴史遺産を保存・活用しつつ、まちづくりの中核施設として防災機能を備えた総合公園として整備が進められている。全面開園は2021年に開園予定となっている。



一次開園エリア: 4.1ha(2019年3月開園)  
全面開園エリア: 21.8ha(2021年開園予定)

本公園の大きな特徴は史跡をいかに活用して市民のための場所にしていくか、市民参加によるW.S.を重ねて計画が進められてきたことと言える。構想から基本設計に携わった(株)空間創研の家本智氏と現地を周りながらお話を伺った。

### 国史跡について



安満遺跡は、約2,500年前の弥生時代の72万m<sup>2</sup>に及ぶ集落遺跡である。居住域・生産域・墓域の要素で構成されており、その関係を時期的にたどることができる。弥生時代の「クニ」の変遷過程を明らかにすることができます。平成5年に国史跡に指定された。(平成23年追加指定)



### 公園の計画について

メインエントランスから入ると遺跡へまっすぐ幅の広い「みち広場」に迎えられる。道でありながら、広場でもある空間で、軸は環濠の中心部に向かっている。みち広場に面して、イベントや利用者の集いの場として利用されているサンスター広場、レストラン、ボーネルンド Park Centerが並び、その前には雨の日や炎天下でも安心して遊べる大屋根と1,000mの人工芝が印象的に広がる。

園内施設は、ネーミングライツのものが多く目つく。もっとも目立つのが、公園のインフォメーションを含め核となる施設であるボーネルンド Park Centerである。ここには、近年増えているボーネルンドの子供の遊び場(有料)があることと、公園事務室、レンタルスペースとして、工作・調理室、多目的スタジオ、多目的室、ランニングステーション、そして、市民活動拠点がある。市民活動拠点のスペースは計画段階からこだわって確保したスペースの一つ。配置も公園事務室の真隣にあり、利用者からとても視認性が良い場所に配置されている。このスペースにはスタッフがいる他、活動の紹介コーナーがあり、一般の公園利用者でも気軽に覗き活動を知ることができる場となっている。また、本公園の樹木は在来種を基本的に構成しており、ベンチもそうであるように寄付金によって植えられている等様々な仕組みが取り入れられている。



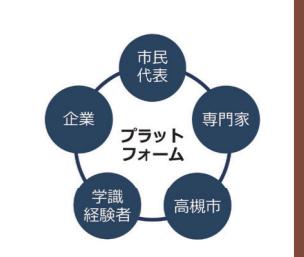
▲ボーネルンド Park Center  
▲みち広場  
▲レストラン

### 市民参加について

安満遺跡公園では、コンセプトとして、「市民とともに育てつづける公園」を掲げている。2014年から市民活動プロジェクトがはじまり、2017年4月からは「安満人俱楽部」として活動が続けられている。

現在は歴史グループ、あまブレーパークの会、あまマルシェグループ、自然グループ、健康グループ、防災グループ、古代米グループ、広報グループ、ペットグループの9つのグループがある。各グループは単独で活動するだけでなく、他のグループとコラボレートを行うことで多面的な活動が次々に生まれていることが特徴といえるだろう。例えば古代米のグループでは、未開園エリアで実際に古代米を作っている。このグループとあまブレーパークの会がジョイントして、田植え前の田んぼで泥んこ遊びをし、田植えの準備を兼ねるイベントがあった。このようなイベントがあることで、専門的な分野に興味がある人だけでなく、遊びをきっかけに歴史を学ぶといったように様々な人に興味をもって参加してもらう良いきっかけとなっている。

また、4月には安満人俱楽部が1年半の歳月をかけて構想を練ってきたマルシェも初開催。前評判も上々で、どのブースも長蛇の列となっていたそうだ。安満人俱楽部主催のマルシェは半年に1度開催予定とのことで、今後のマルシェが楽しみである。



### 管理運営について

現在は安満遺跡公園パートナーズが管理運営を行っている。利用のルールについても、コンセプトがしっかりと受け継がれて、2カ月に一度、指定管理者、民間施設の代表者、行政、そして安満人俱楽部が集まって会議が行われている。この会議が現場の声をフィードバックし続けるというコンセプトを体現する良い仕組みになっているといえる。オープントしてからまだ一年経たないが、たくさんのイベントやプログラムが実際に行われている。イベントプログラムは実に多彩で、毎週開いたくなるような内容ばかりだ。具体的には、4月には「高槻の木をえらぶ」ということ2019」といった高槻の木を知るイベントが開催されたり、6月には公園に泊まろう!という思いから企画が始まった、「公園に泊まろう!パークdeビーパーク」が開催された。ブースの出店や、アーティストの参加、また太極拳やヨガ、ピラティス等も同時に開催されて盛大に行われた。第二回が11月9、10日に開催されるそうだ。

また8月には真夏に誰もが求めるプールと飲食をセットにした「安満遺跡ウォーターパーク&かんぱい祭り」が開催される等、季節に応じて柔軟な企画がなされている。屋外の活用の他にも、パークセンター内の有料施設を活用したクッキング教室やヨガ、ダンスなども積極的に行われている。

このように参加者のライフスタイルに合わせた公園活動ができるよう、創意に富んだ運営が行われている。

※安満遺跡公園パートナーズ:西武造園株、㈱ワールドインテック、㈱地域環境計画の3社で構成された団体



### おわりに

この公園を作っていく上で「一気に整備しない」という考えを持ちながら整備しているそうだ。常に余白を残し、市民と共に作り続けるためである。安満人俱楽部が「私たちは安満遺跡公園を育てる団体です」とうたっているように、残りの整備でも市民活動と連携しながら一部ではニーズを反映していくようだ。これらのことから市民の意識が繋がり、本当に市民に求められている公園がどのように作られていくのか楽しみである。これからの公園づくりのヒントがたくさんつまつた公園であった。

【出典】安満遺跡公園パンフレット、安満遺跡公園ホームページ

編集・構成 福田 祥子、坂田 奈美子